

【四三番歌】

【本文】

水の辺に梅の花さけりけるをよめる 伊勢
春ごとに 流るゝ河を花とみて 折られぬ水に袖やぬれなん

【歌意】

水のほとりに梅の花がさいているのを詠んだ歌 伊勢
春になるごとに、流れる河を花だと思って（手を伸ばして手折ろうとして）、手折れない水に袖を濡らすのだろうか。

【他出文献】 伊勢集（群・西・歌）、新撰和歌、古今六帖三「水」、古来風躰抄

【校異】（片桐全評釈より）

〔詞書〕—ナシ（俗）。○梅花—梅の花の（基・筋・元・公・関・静・六・永・前・伏・寂・昭・建・経・曆・高）。○さけりけるを—さけるを（善・基・筋・元）—さかりなりけるを（六）。○よめる—ヨムダル（永イ・前イ・天イ）—みてよめる（公）○ながるゝ河—ながるゝみづ（龜・筋・元）。○おられぬ水—をられぬなみ（筋・元）。○袖やぬれぬ—そでぞぬれける（筋・元）

cf. 『伊勢集』「春ごとに流るる水を花と見て折られぬ波に袖やぬるらん」

○流るる水を 類・仙—なかるる河を ○折られぬ波に 類・仙—おられぬ水に ○袖やぬるらん 類・仙—袖やぬれなむ

【語釈】

○詞書「水の辺に」—『伊勢集』での詞書は後に記したとおり「京極院」となっている。「伊勢集全釈」では、「この呼称から考えて、おそらく左京極大路に面してあった院と思われるが、その所在は不明。またこの院と宇多帝との関係も不明。」とある。京極院の場所は不明だが、伊勢集の詞書からは院内の池のほとりでの光景を詠んだものと考えられる。『古今集』ではそれを「水のほとり」と漠然とした表現に改変している。

○詞書「梅の花」—後述するとおり、伊勢集では梅ではなく「桜」を詠んだものと解せられる。

○春ごとに

窪田—「春毎に」が過去の春であるか、未来の春であるかを諸注問題としている。余材は、「発句を第二の句の下にうつして心得べし、梅を愛するままに、ながるる水に影のうつれるを、ただことしのみならず、猶行末の春ごとに花とまがひて、をらんとして、はかなく袖やぬれなむとよめる歎。あるひは又、春ごとにとは、今までの過こし方をいひて、猶こりずまに此春も、折れぬ影故に袖やぬれなんとよめる歎」といって両様の解をしている。

竹岡全評釈—次の「年をへて」とともに、「春ごとに」のところに帝に対する言寿ぎの気持が表わされているのであろう。

○流るゝ河を花とみて
新潮—遣水に映った花影を本当の花だと思って。水の清らかさと花の色の鮮やかさ。

新全集—流れる川の水面に映っている花の影を、本当の花と見間違えて。下に「折ろうとしても」と補って解する。

※ 校異で「流るる水」とする本文がある（龜・筋・元）。筋・

元では、四句を「波」として、『伊勢集』西本願寺本系と同じ本文となっている。

○折られぬ水に

松田新釈—折ることのできない水。「れ」は possible の助動詞「る」の未然形。新しい表現で、この歌の中心句。水面に投影する梅の枝を、折ろうとしても折れないのと言う。

新大系—花を「折る」のは唐詩にも好んでよむ。花を、心から愛するやさしい美的行為の一つ。梅は香りを主としてよむが、色（姿）もよむ。裏に異性への想いを連想させるものが多い。実生活で香（こう）を多用したことが背景にある。梅の歌は、移り香・夜の梅・水辺の梅・散る梅、冬部の雪中梅（34・37）などに分れる。

新全集—水面の水の影は折ることができずにの意。

片桐全評釈—「折られぬ浪に」とする本もある。「浪」は「折る」の縁語。東歌・一〇九四「沖にをれ浪」参照。本当の枝であれば折ることができるはずだが、これは水に映っているだけだから、折ることができないといっているのである。

〔鑑賞と評論〕河を花と見て「折られぬ水」と言って洒落ただけと見る見解が優勢だが、物足りない。ゆったりとした春にふさわしく、のんびりと、ぼんやりとして、今年もまた、水に映っている花を折ろうとして袖をぬらしてしまおうのだろうよ…という耽美と余裕こそがこの歌の眼目なのである。

伊勢集全釈—「折られぬ波」水に映った花影は折り取ることができず、手に取ろうとすることによって波が立つので、「折られぬ波」と詠んだ。

秋山—「をら」は「折ら」と袖の縁語「織ら」とを掛けている。

※ 参考歌

◆ 「折る」と「織る」

『後撰集』一四一八（よみ人しらず）

よそにをる袖たにひちし藤衣涙に花も見えずぞあらまし

◆ 「水」と「折る」

『貫之集』一〇六（延喜十八年四月東宮の御屏風）

池のほとりに藤の花さきたる所

水にさへ春やくると立ちかへり池の藤なみ折りつつぞみる

【四四番歌】

【本文】（水の辺に梅の花さけりけるをよめる 伊勢）

年をへて花の鏡となる水は ちりかゝるをやくもるといふらむ

【歌意】

年が経って花を映す鏡となる水は、花びらが散りかかるのを塵がかかるのと同じように曇るといふのだろうか。

【他出文献】 古今六帖六「花」、伊勢集（群・西・歌）、和漢朗詠集（諸本によつては、作者を伊勢の娘の「中務」とするものもある）

cf. ①『栄花物語』「根合せ」—頼通、法成寺新堂を供養

女房は、桜どもに、萌黄の打ちたる、山吹の二重織物の表着、藤の唐衣、萌黄の裳に絵かき、縫物し、羅鈿し、口口置など、めもあやに、「心のゆきて」などいふ歌を、金の具のちひさきを造りて、歌絵にて桜の咲きこぼれたるかたをかきたり。「玉と貫ける青柳など、いとをかし。また、しつらひのかたをして、帳台、唐櫛竈、昼の御座のかたをしたる人もあり。「花の鏡となる水は」とて、いとをかしげなる鏡を池に押ししたる人もあり。

②能「桜川」クセの謡い出し

【校異】○花の鏡―はるの鏡（亀）。

【語釈】

○花の鏡となる水は

新大系―水が花を映すので鏡と見立てた表現。

○ちりかゝるをや

余材抄―散かゝるに塵をそへたり。鏡は久しくなれば塵のかゝりてくもれば、年を経て花のために鏡となりて影を映す水も、花のちりかゝるをやくもるとはいふらんとなり

松田新釈―花びらが散りかかるに、鏡に塵がかかつて曇る意をかけた。ここにこの歌の発想の新奇さがある。

新全集―花が「散りかかる」意に、鏡に「塵がかかる」意をかけた。人が用いている鏡には、曇るということがあるので、花の鏡にも、曇るということはあるだろうと、前半で話題を提示して、それは「ちりかかる」のを「くもる」といつているのだからかと、後半で解決している歌。

片桐全評釈―『伊勢集』の詞書の「池」は、この歌にふさわしい。澄みきった鏡に塵がかかつて曇るのを前提に、普段は澄みきっている池水に花がちりかかつているさまを「鏡のように澄んだ池水が曇る」と言いなしてみたのである。言葉の上の遊びときめつけてしまわないで、池に花の散り交うさまを、あえて「曇る」と表現した耽美と言葉のセンスを思うべきであろう。

角川新版―掛詞。落花の美しさを塵がかかるものと見る、意外な取り合わせ。

伊勢集全釈―花が水の面に散りかかるのは、鏡の面に塵がかかるようなもので、つまりこれを、「くもる」と言うのであろうか。「散りかかる」に「塵がかかる」を懸ける。「くもる」は、鏡のおもてがものの形を鮮明に映し出さなくなっている状態をいう。

【参考】『伊勢集』

京極院に亭子みかどおはしまして花の宴させたまふに、まゐれとおほせらるれば、みにまゐれり、いけに花ちれり

97年ごとに花の鏡となる水はちりかかるをやくもるといふらん
98毎春に流るる水を花と見て折られぬ浪に袖やゆるらん

又の日

99今日まではながれいでぬをみなかみの花は昨日やちりはてにけむかへし、すゑなは

100さくらばなひとさかりなる物なれば流れてみえずなるにざるべき

※詠歌時期について

『古今集』以前とは言っても、出家直後の法皇が山踏みに熱心であられたことを思えば、さらにそれ以前の在俗時か、という気がする。となると、伊勢の生んだ御子がかく幼少であったころに相当し、桂への御幸とも近い時期ではないかと思われる。「参れとおほせらるれば見に参れり」という叙述には、宇多帝が特に伊勢を召し出された、という感じがある。『伊勢集』では、さきにあげた二首の歌のあとに、なお（中略）二首がつづいており、これによつて、伊勢は翌日も京極院に逗留したことがわかる。やはり寵幸のあったころではなからうか。

（山下道代『王朝歌人伊勢』筑摩書房 平成二年）

【配列】

松田新釈―前の歌と同じ時と場所で詠じた歌で、前歌が水面に影を映す咲く梅を対象としていたのに反し、この歌では、水面に散る梅の花びらを中心に詠じている。咲くと散るのこの二首は、

一対的に考えられたものであるが、発想や表現技巧の面でも共通した新鮮さが認められる。すなわち、両者いずれも現実に花咲く梅花でなく、水に投影する梅花を取り上げ、一方では「折られぬ水」とし、他方では「花の鏡」としている。特にこの歌では、「ちりかかるをやくもる」と掛詞の技巧を駆使し、鏡に塵がかかるように、梅の花が散りかかると表現している。「花の鏡」は、譬喩であるが、譬喩の仕方がいかにも美的で、静かな水面に散り浮かぶ梅の花びらを印象的ならしめている。構造上から言えば、この歌は、次の「散る梅」に至る橋渡しの役割も果たしている。

※松田新釈では、梅の歌群を「咲く梅」十三首、「散る梅」四首で構成しているとし、前者を「梅の香」「折り取った梅」「春の夜の梅」というグループに分けている。新大系では、32番歌から梅十七首としてまとめ。前述のように、移り香・夜の梅・水辺の梅・散る梅とする。

※『古今集』では、43「春ごとに」44「年をへて」となっているが、伊勢集では、「としごとに（としをへて）」「はるごとに」と逆になっている。これは、伊勢集の三つの系統（西本願寺本・群書類従・歌仙家集本）のどれをみても同じである。

また、『伊勢集』では、詞書の「花の宴」、連作の100番歌「さくらばな」とあることから、この四首の「花」は桜と考えられる。伊勢の生没年は未詳だが、元慶元年（八七七）ごろ生まれ、天慶二年（九三九）ごろ没したとみられている。『古今集』では、作者在世中にもかかわらず、歌の順序を逆にし、配列を入れ替えていることになる。

【参考文献】

『古今和歌集関連』

旧大系―佐伯梅友『日本古典文学大系 古今和歌集』岩波書店

昭和三年

窪田―窪田空穂『古今和歌集評釈』東京堂 昭和三五

松田新釈―松田武夫『新釈古今和歌集』風間書房 昭和

四三・五〇年

竹岡―竹岡正夫『古今和歌集全評釈』右文書院 昭和五一年

集成―奥村恒哉『新潮日本古典集成 古今和歌集』新潮社 昭和

五三年

新大系―小島憲之・新井栄蔵『新日本古典文学大系 古今和歌集』

岩波書店 平成元年

新全集―小沢正夫・松田成穂『新編日本古典文学全集 古今和歌集』

小学館 平成六年

片桐全評釈―片桐洋一『古今和歌集全評釈』講談社 平成十年

角川新版―高田祐彦『新版古今和歌集』角川ソフィア文庫 平成

二一年

ちくま文庫―小町谷照彦『古今和歌集』ちくま学芸文庫 平成

二二年

【その他】

伊勢集―関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』風間書房 但し、44

番歌での本文は『新編国歌大観』（角川書店）に拠り、一部表

記を改めた。

秋山―秋山虔『王朝の歌人5伊勢』集英社

栄花物語―山中裕他校注『新編日本古典文学全集 栄花物語③』小

学館

余材抄―『契沖全集』第八卷 昭和四八年三月